

目次

はじめに——甲子園の歴史は怪物たちの歴史——

9

第一章 21世紀の「怪物」たちの正体

15

多彩な球種で甲子園を沸かせた大エース

——ダルビッシュ有（2003・2004年、東北）

2年で大舞台の決勝で150 km/hを記録した優勝投手

——田中将大（2005・2006年、駒大苫小牧）

高校時代からプロ級の21世紀最強打者

——森友哉（2012・2013年、大阪桐蔭）

コロナ世代、無敗に終わった幻の速球王——高橋宏斗（2020年、中京大中京）

春夏連覇に導いた21世紀最強投手——藤浪晋太郎（2012年、大阪桐蔭）

プロでも活躍する「怪物」は総合力がカギ

第二章 ポテンシャルと基礎能力

清原和博に並ぶ5大会背番号一桁で甲子園出場

——梅田大喜（2002～2004年、明徳義塾）

ダルビッシュを支えた「最強の2番手投手」

——真壁賢守（2003・2004年、東北）

華麗な守備で甲子園を魅了した「最高の二塁手」

——町田友潤（2007・2008年、常葉菊川）

甲子園で1年最速148km/hをマークした大型右腕

——伊藤拓郎（2009～2011年、帝京）

伝家の宝刀シンカーが代名詞の優勝投手

——吉永健太郎（2010・2011年、日大三）

宿敵大阪桐蔭相手に2本の満塁弾。決勝戦も優勝決定弾を放つ

——松本哲幣（2015年、敦賀気比）

歓声を沸かせるニューヒーロー——上野翔太郎（2015年、中京大中京）
なぜ甲子園を沸かせてもプロ入りできないのか？

第三章 甲子園での「覚醒」

日本一への試行錯誤。「ハンカチ」旋風で日本一に

——斎藤佑樹（2006年、早稲田実業）

大舞台で覚醒。17年ぶりの日本一に貢献した甲子園史上最強の1番打者

——浅村栄斗（2008年、大阪桐蔭）

大会中に成長したシンデレラボーイ——今井達也（2016年、作新学院）

夏の甲子園最多本塁打記録——中村奨成（2017年、広陵）

甲子園の魔物を味方につけたエース——吉田輝星（2018年、金足農業）

甲子園は選手の潜在能力が引き出される舞台

第四章 「通算本塁打数」と「最高球速」

21世紀の幕開けを飾る豪腕——寺原隼人（2001年、日南学園）

清原和博に並ぶ1試合3本塁打を記録

——平田良介（2004・2005年、大阪桐蔭）

第五章

「二刀流」の21世紀

豪速球で衝撃を与えたみちのくのプリンスK

——佐藤由規（2006・2007年、仙台育英）

バットコントロールを活かした巧打者のスラッガー時代

——中村晃（2006・2007年、帝京）

左腕最速を大舞台で記録——菊池雄星（2007・2009年、花巻東）

高校通算111本を誇る華やかさを兼ね備える大型スラッガー

——清宮幸太郎（2015・2017年、早稲田実業）

速球派投手の現在地

本塁打記録の功罪

元祖スーパー1年生・二刀流——中田翔（2005～2007年、大阪桐蔭）

甲子園で154km/hを投げる「小さな巨人」のスラッガー

——今宮健太（2008・2009年、明豊）

第六章

球児のセカンドキャリア

「天衣無縫」な活躍をする世界一の野球選手となる源泉

——大谷翔平（2011・2012年、花巻東）

「最強世代」を支えたユーティリティープレイヤー

——根尾昂（2017・2018年、大阪桐蔭）

令和の時代に「エースで4番」を体現した甲子園のスター

——山田陽翔（2021・2022年、近江）

なぜ二刀流で活躍する選手はプロ入りしやすいのか？

北の国を沸かせた「夏2・9連覇」世代からエリート商社マンに

——鷺谷修也（2005・2006年、駒大苫小牧）

選手として甲子園で活躍。次は監督として甲子園を目指す

——副島浩史（2007年、佐賀北）

元祖・琉球トルネードで春夏連覇した左腕は母校の指揮官に

——島袋洋奨（2009・2010年、興南）

高卒からアメリカに挑戦した高校通算本塁打数記録保持者

——佐々木麟太郎（2022・2023年、花巻東）

高校球児の「セカンドキャリア」

おわりに——高校球児が「プロ以外の未来」を見据える時代へ——

註

226

211

はじめに——甲子園の歴史は怪物たちの歴史

1915年に第1回大会が開催された全国高等学校野球選手権大会は、2025年に110周年を迎える。開催当時から多くの野球ファンを熱狂させてきたが、1924年に阪神甲子園球場に会場を移すと「甲子園」という愛称で親しまれ、以来全国の高校球児のみならず日本人にとって特別な場所であり続けている。その舞台を彩ってきたのが、「怪物」と呼ばれる選手たちだ。甲子園大会で、何百人というほかの高校球児とは違う圧倒的な力と成績を見せた選手は、その年の甲子園の「顔」となる。

例えば、清原和博と桑田真澄ますみのKKコンビ。彼らは1年生の夏の甲子園から名門PL学園の4番とエースとして活躍し、1983年の夏から1985年の夏まで5季連続甲子園に出場。うち二度の優勝と二度の準優勝をもたらした。1年生のころからプロ顔負けなバッティングは観客の度肝を抜き、高校通算本塁打64本を記録した清原と、精密な制球力と多彩な変化球を駆使し甲子園で通算20勝という驚異的な記録を残した桑田は名実ともに「怪物」と言える。

その二人の2学年下には、「高校野球史上最高の遊撃手」と呼ばれた立浪和義たつなみがいた。広い守備範囲と強肩から生まれる美しい守備と、安定した打撃力、そして1987年にはチームを春夏連覇に導いたキャプテンシーは、高校野球ファンを沸かせた。

PL学園の春夏連覇の5年後、1992年の夏の甲子園で起きた「5打席連続敬遠」という前代未聞の出来事で歴史に名を残したのは星稜せいらの松井秀喜。1992年の選抜高等学校野球大会（春の甲子園）では前年度に比べ本塁打数が激減するなか本塁打を量産していた彼は、その打撃力から夏になると打たせてもらうことすらできず社会問題にまで発展した。チームは準々決勝で敗退したものの、松井個人は日本中から注目を集める「怪物」となったのだ。

1998年、ついに「平成の怪物」という存在が現れる。横浜の松坂大輔である。夏の甲子園の準々決勝のPL学園戦では延長17回を250球で投げ抜き、決勝戦ではノーヒットノーランを達成。大会通算62奪三振という圧倒的な成績でチームを春夏連覇に導いた。

いまあげた選手だけでもさまざまなポジションとプレースタイルを持った「怪物」がいることがわかるが、全員に共通する3つの要素がある。

①ひと目観みただけでほかの高校生とは違う「規格外の力」がある

②後世にもわかる伝説的な記録を作っている

③個人の力でチームの勝利を背負い込んでいる

例えば①。清原の華やかなバッティング、桑田の冷静な投球術、立浪の華麗な守備、松井の圧倒的な存在感、松坂のタフネス——彼らのプレーをリアルタイムで観た人々のみならず、記録映像で観た者はその圧倒的な力に魅了されてしまう。

さらに②。これらの選手たちが残した記録は、数字の側面でもその偉大さを証明している。

清原の甲子園通算13本塁打、桑田の甲子園通算20勝、松坂の大会通算62奪三振——これらの数字はリアルタイムでプレーを観られずとも、ひと目でその力を示すものであり、後世の選手たちの目標となっているのだ。

そして③。チームを優勝に至らせられずとも、圧倒的な個人の力はチームに傑出した成績をもたらす。例えば、作新学院の江川卓^{すぐる}は1973年春の甲子園で、優勝は逃したが3試合連続完封を含む60奪三振の快投で、甲子園を支配した。星稜の松井秀喜も1992年、5打席連続敬遠という異例の対応を受けながら、その存在感で大会全体に強烈な印象を残した。こうした選手たちは、結果以上に記憶に残る「怪物」として語り継がれている。

このように、20世紀末の高校野球で、「超高校級」と称される選手たちは、一芸に秀でた才能でその名を轟かせていた。そしてそうした力がより光って見えるのは、一人の選手が2年半しかプレーできず、大会期間中に負けたら終わりの緊張感にさらされる甲子園という舞台がある。ここである。

しかし、時代が移り変わり21世紀を迎えたいま、高校野球の「怪物」たちの条件は変わってしまった。単なる一芸の突出だけではなく、総合的な能力の高さが求められるようになった。投手であれば球速だけでなく、多彩な変化球と制球力に加えフィールディングや打撃力、打者であっても長打力だけではなく各大会の安定感や高い出塁率を維持する選球眼、走塁、守備力までもが水準以上を求められる。この変化の背景には、選手のレベルが上がってきていることや評価基準の変化がある。

松坂以前の「怪物」たちは、甲子園という舞台で結果を残すことが最重要視され、勝負強さや定性的な評価である印象が評価の中心だった。一方で、松坂大輔以降の怪物たちは、甲子園での活躍だけでなく、「数字（球速や本塁打数などの投打の指標）」や「総合力」、「安定感」がより重視されるようになった。

ダルビッシュ有の総合力の高さはもちろんだが、田中将大や藤浪晋太郎が150 km/h超えの速球で注目を浴び、大谷翔平が高校時代に160 km/hを計測し、速球という「数字」そのもののレベルが向上したこともあり、話題となったことはこの変化の象徴である。また、メディアの多様化や発展によって「甲子園での結果がすべて」という時代ではなくなった。佐々木朗希は甲子園に出場しなかったにもかかわらず、163 km/hという数字のインパクトで全国的な注目を集めた。

野手は、清宮幸太郎が高校通算111本塁打という前例のない記録で世間を驚かせ、森友哉や岡本和真も高校球児としては、規格外の打力の高さが評価されていたように、スカウトの目は甲子園の結果だけではなく、より広い視点から選手の将来性を判断するようになっていく。

こうした変化のなかでも、甲子園の舞台で人々を魅了する選手が「怪物」と呼ばれることに変わりはない。ただ、その条件が「一芸に秀でた圧倒的な実力」から「規格外の数字と総合力」に変わりつつあるのが、21世紀の甲子園の怪物の特徴である。

筆者は『戦略で読む高校野球』（集英社新書、2023年）において現代の野球では一人の突出した個人の力だけではなく、ベンチを含めた選手の総合力がチーム全体の勝利を導くカギと論じた。

そうした時代において、21世紀の「甲子園の怪物」たちはどのように観客を魅了しているのだろうか。高校時代から現在に至るまで圧倒的な成績を残し続けているレジェンドや甲子園で覚醒しスターに駆け上がった選手だけではなく、印象的なプレーをしながらもプロでは活躍できなかった者、そして新しい道を歩んだ人たちまで、高校野球の記憶に残るプレイヤーたちの分析を通して、考えていこう。

なお、プロ野球に進んだ選手は、原則として最終所属球団、もしくは2025年開幕時点の所属球団を記載する。また、選抜高等学校野球大会は「センバツ」、全国高等学校野球選手権大会は「夏の甲子園」と表記する。